

せていただいています。広い目で見れば機器分析の分野になるのですが、今まで機器センターで使用してきたメーカー製の市販品とは異なり、分子研で設計、開発された機器を扱うのは初めて経験することが多く、大変なことも多いのは事実です。その中で良く感じることが、今までの経験上でこの部品はどのように機能するのだろうという思い込みの下、いざ実際に使用してみると実は違う機能構造であったことがあり、戸惑うことがしばしば見られます。幸いにして大きなトラブルになっていないことが救いですが。

さて、技術職員という職種の役割としては、同じ環境の下でその技術を高め続けるのも大事である一方、技術の幅を広げるという意味では、今まで経験してこなかった様々なことを勉強させていただける機会を得ることができたことは、幸運であると感じ仕事に取り組んでいます。今後も柔軟な姿勢で業務に取り組む所存です。



図4 担当しているビームライン (BL6U) 脚立の上で作業するこの風景が気に入っている。

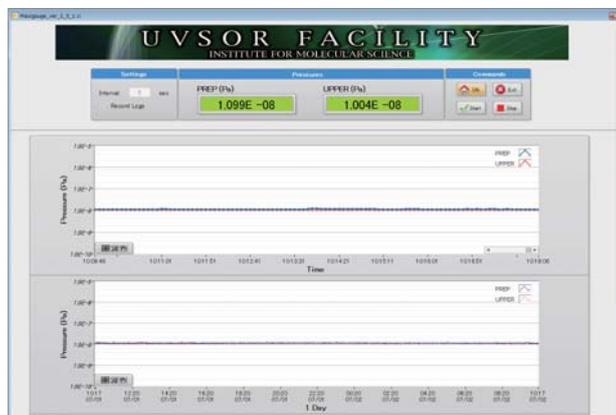


図5 初めてLabVIEWで作成した真空度を読み込むVI。

覽古考新 14 | 1999年

分子研も創立以来四分の一世紀近くなるとさまざまな点で設立当初の様子とは様変わりがしてくる。顔触れは勿論のことだが、運営方針や研究内容にも大きな変化がもたらされてきた。場合によってはその存在理由さえも変わったかもしれない。

.....

このような変化は時代の流れや要求に沿って起こってきたものであろうが、そこでちょっと気になることが心を掠めないではない。それは、そもそも分子研では世界に先駆けた研究をするところではなかったのかという思いである。誰もやっていない研究課題には世間は全く無知である。しかし、それが重要な課題であることがわかれば世間はついてくる。分子研が世間についていっては何にもならない。設立当初は人材、機器、研究費と3拍子も4拍子もそろっていたので、やすやすと（というのはいささかいいすぎか）世間あるいは世界をリードすることができたであろうが、研究費が並になると研究も並になってしまっただけでは仕方がない。ここ一番、初心にかえって新たな研究意欲を發揮してほしいものである。

分子研レターズ No.39「巻頭言：舵」(1999年)

大瀧仁志 (立命館大学教授)